

1. 図画工作科における未来そうぞう

(1) めざす子ども像

図画工作科におけるめざす子ども像は「多様性を認め合い、新たな意味や価値を何らかの形でつくり出そうとする子ども」である。「多様性を認め合い」とは、自分の考えとは違った他者の考えを排除せず、そこにあるものとして認めることである。「新たな意味や価値」は、他者の考えを認めた上でつくり出される。

「何らかの形」とは、絵や立体・工作に表す活動や造形遊びをする活動における子どもたちの行為、表情やつぶやき、作品や文章や発表での感想などのことである。

子どもたちは、形や色などから、おもしろさやよさ、美しさを感じ取り、イメージを広げていく。材料・用具、他者などに関わりながら<いいこと>ⁱを考え、これまでの経験を活かしながら、今を手がかりに思いついたことを試していく。そこでつくり出されるものは、ものとしての作品を超えた新しい意味であり、新しい自分である。このことが、<いま—ここ>ⁱⁱを生きることであり、未来をそうぞうしていることになる。と考える。

(2) 図画工作科がになう3つの実践力

図画工作科では他教科同様、子どもたちの力が常に総合的に働いているため、「主体的実践力」「協働的実践力」「創造的実践力」の3つの資質・能力が別個の単体で存在するものではないと考える。以下に3つの実践力を記しているが、これらは、個々の資質・能力が発揮される一側面であり、常にそれぞれが同時に発揮されている。その上で、3つの実践力につながる図画工作科を通して育む力と3つの資質・能力とのつながりについて以下に述べる。

① 主体的実践力

自分の思いに合わせてつくったり、思いついたことに合わせて材料・用具の扱いや表現方法を工夫しながら表したりする行為が、主体的実践力につながると考える。

- ・「すごい！うまくいった」「あれっ？思ったのとはちがう…けど、おもしろい！」
- ・「こんなことをしたらおもしろそう。」「こうしたらどうなるのかな？」「こうしてみよう！」

② 協働的実践力

お互いの多様性を認め合って共に高めあっていく行為が、協働的実践力につながると考える。

- ・「友だちのここがいい！」「自分とは違うけどおもしろい！」「友だちのやり方すごかった！」
- ・「一緒にやったから、すごいものがつくれた！すごいことになった！」

③ 創造的実践力

意味や価値を変化させたり、新たにつくり出したりしていく行為が創造的実践力につながると考える。

- ・「うわっこんな見方したことなかった！」「こんなの初めてや！」

*同じことのように見えても、自らが一瞬一瞬刷新されているため、すべては新しい経験となり、出会ったものやことすべてに対して、今までとは違うよさや喜びやおもしろさを感じ、それまでの自分の価値観に照らし合わせながら意味や価値をつくり出していく。

2. 図画工作科において「未来を『そうぞう』する子ども」を育むための手立て

《造形遊び的思考ⁱⁱⁱにより、主題の生成をうながす》

子どもたちは、図画工作科の授業での一つ一つの行為を通して、常に意味や価値をつくり、つくりかえ、つくり続けている^{iv}。このように新しい意味や価値をつくり出すことは、図画工作科の本質^vであり、人間にとって極めて重要な能力である。この能力を発揮しているとき、同時に、本校が設定する3つの資質・能力

のうち、特に創造的実践力^{vi}を発揮しているということができる。子どもたちはこの能力を、常に発揮しているのだが、よりこのような状況が多く生み出される題材を設定することで、どのような状況においても、新たな意味や価値をつくり出そうとする力が育まれると考える。

① 魅力的導入 わくわくするはじまり ～「はやくやりたい！」でも「まず、見たい！ききたい！」～

そうぞうすること（「イメージ・クリエイト」）に振れ幅があるとするならば、この振れ幅を2次元的にも3次元的にも大きくすることは、多様性を受け入れることにも、自分なりの考えを持つことにも、それらをつくり出す何らかの形にも大きな影響をもたらすのではないかと考える。図画工作科において、自分や友達のつくり出したものを見あったり、つくり出したことをききあったりすることは、自分の（意味）世界を広げ、価値を深める。そのため、自分だけの世界で生きている（と思い込んでいる）低学年的思考から高学年的思考に向かうにしたがって、それぞれの経験を共有することを大切にしていきたい。そのために、本時の初めに、前時の授業のタイムラプス動画や、個人で最後にふりかえりとして撮った“その日”の記録動画を見ながら、本時の見通しを持ち、今日の自分はこんなことをしてみたい、あんなことをしてみたいという、わくわく感につなげていきたいと考える。

② 意欲的終末 さめないふりかえり

子どもたちがつくり出した考え（ものやこと、意味や価値など）を、子どもたち自身が見とれるようなふりかえり（の時間）をデザインする。その時間（題材）のふりかえりは、次の時間（題材）のはじまりと同義であり、わくわくするはじまりをデザインすることにつながる。このことが、図画工作科において、やりたいという意欲につながっていく。

子どもの思考の流れを分断してしまう教師の声、ワークシート、チャイム。学校ならではの特色であり、もちろん様々なことに触れることができるという大きなメリットがあることは前提だ。しかし、無理やり書かされたワークシートには、焦りの色しか見えず、その時間どんなことをしてどんなことを考え、どんな面白いことが起ったのか、教師にも子どもたち自身にも読み取ることが出来なかつたりする。これは大変もったいないことである。

さらに、毎回の終わりに今日の感想や次の自分へ向けての伝言などを動画で残したのものや、その時間の授業の全貌を取ったタイムラプスの映像を、次時の始まりにみんなで見ながら、今までの自分たちから今日の自分を想起できるようにする。その中で、形や色などによるコミュニケーションを促進し、その活動を通して育てていく資質・能力を共有することができる。

3. 図画工作科における評価について

②で述べた通り、子ども達自身が自分たちの行為や意味・価値を見とることのできるふりかえりをデザインすることは、子ども自身の自己評価につながる。また、これまで通り、活動中の目線、姿勢、身振り手振りなどの没頭する姿や、発言、ワークシートなどの記述などからも十分に見とっていく。

i <いいこと>とは、一般的な良い悪いではなく、その子にとって価値のあることを指す。

ii この<いまここ>のとらえについては、発達心理学者浜田寿美男氏の<このいま>の概念を参考にした（浜田寿美男、『「私」とは何か』、講談社選書メチエ、1999など参照）。浜田氏は、著書『「私」とは何か』において、この身体のまわりのごくわずかな範囲だけが、厳密な意味での自分の実感のある世界であり、周囲のものごとを、この身体によってとらえ、動かしていると、「私」は「私」の「この身体」のある<このいま>を生きている、と述べている。また、元文部省教科調査官及び視学官の西野範夫氏は、造形遊び等図画工作科に関する考察の中で、子どもの生きる世界や意味生成を論じる際に「今、ここ」という言葉を用いている。（西野範夫、「<新教育>を立ち上げる造形遊び」、『美育文化』、Vol.48, No.18 美育文化協会、1998, pp.52-53など参照）

iii 造形遊びそのものではなく、造形遊びの考え方のこと。「造形遊びをする」では、児童が自ら材料や場所などに働きかけ、そこから発想していく。本論では、造形遊びの思考を、材料やその形や色などに働きかけることから思いつく発想や構想等のこととする。

iv 阿部宏之、「平成29年版 小学校 新学習指導要領 ポイント総整理 図画工作」、p141、大泉義一、「内容取り扱いに関して 児童のよさや個性を生かす活動」において、大泉は、活動の全過程において、子供が「つくり、つくりかえ、つくる」こととは、子供が自分のよさや可能性を見いだすことと同義であると述べている。

v 学習指導要領に、「造形的な見方・考え方」は「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくり出すこと」と記されている。

vi 総論より「創造的実践力」は、よりよい未来をつくるために、新たな意味や価値を生み出し続けることができる力。